献辞

相浦先生と初めて親しくお話しをさせて頂きましたのは、きっと、茎田・矢部両先生に私を加えた三名の法学部就任歓迎会のあった昭和五八年四月の夜半、二次会の席であったろうと思います。左前のテーブル越に座っておられた先生の穏やかな笑顔が、いまでもはっきりと脳裏にあります。そう、あれからずーとあの穏やかな笑顔で、そしてゆったりとした話し方で、先生はいつも私どもに接して頂きました。駐車場、第二研究棟、教務課、入試センター、教授会などでお会いするとき、いつもながらの私のつまらない話しに先生はいつも丁寧にそして優しく対応して頂きました。駐車場からにこにこ笑いながら軽やかに降りてこられる先生にもう二度とお会いできないかと思うと、残念でなりません。

昨年六月の下旬のこと、当時、まだ闘病中の相浦先生が出講された日に、先生はわざわざ私の研究室にまでおいで頂き、ご病状のことなどを話して頂きました。同時に、先生はご自身の授業のピンチヒッター役の先生方に対する感謝の念を語られました。先生にとっては「不覚にも！」であったかもしれませんが、その際に先生の目頭に思わずあふれ出ました涙に、私もなんともいえない感銘を受けました。思えば、あれが生前の先生とお会いした最後の機会になりました。それにしても、病んだお身体で最後の最後まで授業を続けられた相浦先生には、心から敬服いたします。あの元気だった先生のことですから、思う存分に学生を指導できないもどかしさは大変に辛いことであったろうと想像できます。しかし、病軀をおしてでも教壇に立たれた先生のお気持ちは、必ずや学生たちに伝わっているものと確信します。

ひと頃、法学部では近郊の温泉地や名勝地に出かけて、懇談する行事（法学部旅行）を続けていました。本当に「今は昔」のことになりましたが、休日を利用してひとつ学部の教員がそろって旅行し、語ることの意義を相浦先生はよーく理解して、いつも率先してこの旅行に加わっておられました。一緒に温泉に入ったり山に登ったりして、夜になると歓談したあの当時の懐かしい思い出が、アルバムを開きますとよみがえってきます。また入試センター長として入試業務に全力を傾注しておられた頃の相浦先生のご活躍も忘れることはできません。入試センターに行きますと、先生はいつも在室して黙々と仕事をしておられました。そして笑顔で対応して頂きました。昨夏の相浦先生のあまりにも早すぎるご逝去は、最愛のご家族の皆様だけでなく、法学部そしてわが修道大学全体にとりましても大きな痛手となりました。個人的なことながら、私にとりましても安心して四方山話をしたりお願いのできる先輩を失ってしまい、本当に残念な思いです。心から相浦先生のご冥福をお祈り申し上げます。

相浦先生の本学および法学部でのご活躍に対するお礼と先生への追悼の気持ちを表して、本号を相浦先生の追悼号にさせて頂きました。

法学部長　豊田博昭